# 公共的関心の合理的根拠？

## ―進化ゲーム論による説明の可能性―

数土　直紀
（学習院大学）

H.アレントは、その大著『人間の条件』において、人間の活動力を“労働”、“仕事”、“活動”の三つに分類し、他者との関係によって支えられる“活動”の意義を強調した。では、労働から解放された後、貨幣によってその価値を一元化される“仕事”では生きる目的になりえず、有限でしかない自己という存在を記憶という形で他者との関係の内にとどめようとする“活動”こそが重要になるという彼女の哲学を、どのように理論化し、またモデル化することができるのだろうか。

本報告では、進化ゲーム論をもちいて、そのような“活動”が行為者によって選択される過程のモデル化が試みられる。具体的には、他者の境遇に関心を寄せる利得関数の存在を想定し、そのような利得関数が行為者によって選択され、かつ均衡を実現できるような条件の特定化が試みられる。

分析の結果、ある特定の条件下では他者の境遇に関心を寄せる利得関数が行為者によって選択され、均衡を実現できることが示される。したがって、外的な強制がなくとも、自発的に他者の境遇に関心を寄せ、他者の境遇が改善されることを自身の効用に一部に組み込む行為者が出現しうる。しかし同時に、そのような均衡状態ではフリーライドの問題が生じており、公共性の問題の困難さが再確認される。